

## 昔話の扉をひらく

講演者 小澤 俊夫氏

(筑波大学名誉教授・元白百合女子大学教授)

日時 2022年7月30日(土) 13:00~15:30

会場 Zoomによるオンライン会議形式

こんにちは。小澤俊夫です。なんかすごい久しぶりなもんだからね、というか白百合女子大学の方々にお会いするの、本当に久しぶりなもんだから、とても楽しみにしていました。今日は、こういうZoomを通してなもんだから、これって、かえっていいですね。みんな名前が出てくるからね、名前全部思い出せるわけで、そういう良さがありますね。でも、Zoomで話をするっていうのは、僕は初めてなもんでね、うまくできるかどうか分かりませんが、まあ聞いてください。

貴重な時間だからいきなり本題に入りますね。初めに僕のほうから質問させてもらいたいんですけども、「昔話はどこにありますか？」って僕が聞いたら、皆さん何を思い浮かべますか。「昔話ってどこにあるの？」って言われたら。「本に書いてあります」と思うかもしれないね。あるいは「絵本に書いてあります」と思うかもしれないね。あるいは「昔話集に出ています」と思うかもしれない。いろいろあると思うんだ。「時々テレビに出てきます」とかね。

だけども、昔話が本当にあるのは、それが語られている時間の間だけなんだよね。昔話は語られている時間の間にだけ存在する。これが一番大事な命題だと思うので、どうぞよく覚えておいてください。

時間の間にだけ存在するっていったら、もう気が付いてると思うんだけど音楽もそうだよ。音楽も生の演奏で考えてみてください。演奏されている間だけ存在する。終わったら消えちゃう。そういうものですね。音楽の場合には、そういう音楽の性質を知ってて、作曲家たちは、聴いてもらって分かりやすいように音楽を作ってるわけね。聴いて心地よいように作ってるわけですね。

昔話も実はおなじなんです。語り手たちは、語り手っていう意味は、僕が言うのは、田舎のおじいちゃんやおばあちゃんたちね。もう今は、ほとんど昔のような囲炉裏で語るなんてことはなくなってるから、本当の意味での語り手っていうのは少なくなっただけでも、でも、とにかく語る人は、自分が語っていることが子どもの耳

に入っていくってことで語ってるわけですよ、当たり前の話。ってことは、耳で聴いてもらっても分かりやすいような言葉遣い、分かりやすいような文章の構成で語ってるんだよね。

これはね、僕は若いころ、20年ぐらい、ずっと田舎へ昔話を聴きに行ったんです。いろいろフィールドワークやったんですけども、みんなそうでした。語ってくれるのは、だいたいおじいちゃんやおばあちゃん、年の上の人なんだけど、その方々はみんな、子どもたちが聴いて分かりやすいように語ってる。それはもう確かだよ。そして、子どもたちが分かって聴いてくれることが喜びなんだね。それが喜びだったわけです。それがもう見て取れます。はっきり分かる。

そのときね、僕は耳で聴くことに興味があるもんだから、一生懸命聴いたんですけども、はっきり、やっぱり分かりやすいように語ってるよ。文脈が分かりやすいようにとか、文の区切りが分かりやすいようにとか。たまに下手な語り手がいて、文脈の区切りが分からないで、べらべらべらべらってしゃべるって人もいたけど、それはわりと男の語り手が多かったね。おばあちゃんはそういうこと、あんまりなかったね。

とにかく、語り手は自分の語ってることが耳で聴かれてるんだということを意識して、語ってるわけですよ。目で読まれているだろうと思っていななんだよね。そのことが、昔話の形っていうかな、文体、語り口に強く影響してると思うのね。

そんなことをわざわざ言うのはですね、今は皆さん、昔話っていうと、大抵本に書いてあると思ってると思うんだよね。本に書いてある、確かにそれが多いです。そういうのは、大抵は児童文学関係の方々がやってるわけね。児童文学関係の方々っていうのは、普段何をしてるかっえば、だいたい創作してるわけだよ。ってことは、文章を紙に書き付けてるわけよ。ってことは、あとでそれが読まれるであろうことを期待してるわけね。読まれるであろうことを期待して書いている。

だから、書く文章は、当然のことながら読んで分かりやすいような、そして読んで楽しめるような文章を書いている。あるいは読んで目に見えるような文章を書いている。とにかく「読んで」なんです、基本は。「聴いて」じゃないんだよね。そこがですね、僕から見ると、児童文学の方々が昔話を本にした場合の危険性というかな、危険性と言ったら失礼かもしれないけど、弱点になってしまっていると思うのね。

どうしても、目で読む文章ですから、描写がたくさん入っちゃう。描写がたくさん入って、説明が入る。状況描写とか、あるいは心理的な説明とかが入っちゃう。その代表的なのが松谷みよ子さんだけだよね。だから松谷さんの文章は、読むと非常に豊かでしょう。だけど、あれを覚えて語るなんてほとんど不可能ですよ。つまり、覚えて語る文章ではなくて、目で読んでもらうことを期待しているからね。

僕がこんなことをうんと強調して言うのはですね、今はもう昔話っていうのは、ほとんどの人が本で読むと思っているから、わざわざそれを言うのね。本で読まれる文章が、すなわち昔話の本来の文体だと信じ込んでいる方が多いから、わざわざそんなことを言ってるわけです。

なぜそんなことをわざわざ気にするかというと、僕はやっぱり昔話は本来の形がいいと思ってるのね。本来の形ってのは何かっていうと、大人が子どもに、あるいは若い人に、耳で聴かせてやること。語って聴かせてやること。それが一番いいと思ってるもんだから、こんな話をしてるわけです。

今日はそのことを中心にお話ししていきますけども、子どもたちにとっては、お話を耳で聴くっていうのは特別なことなのよ。もちろん字が読めるようになったら、字でたどって読むこと、それも楽しいでしょう。だけど大人にね、親でもいいし、おじいちゃんでもいいし、関係ない大人でもいいんだけど、大人に声で読んで聴かせてもらうってのは特別な喜びなんだよね。なので、僕はそれを強調して言ってるわけです。

その特別な喜びっていう意味は、声もあるでしょう。それぞれによって声が違うよね。それから、しゃべり方も違うでしょう。それから、特に語尾が違ってくるよね。日本語ってのは語尾がだいたい変わってくるね。それから声が違うのと一緒に、強調の仕方とかも違って。だからお話を聴くっていうことは、文章を立体的に聴いてるわけです。文章って言わないほうがいいのかもしいないね。言葉を立体的に聴いてるわけですね。

それが子どもにとっては、あとで思い出すがになるわけですよ。たとえば、もういなくなっちゃったおばあちゃんの話し声ははっきり耳に付いている、そのおばあちゃんから聴いたお話が耳に残っているなんていう経験がいっぱいあるんじゃないですか。そういう経験がたくさんある。それが子どもたちを守っていくんだと僕は思うのね。自分があのおばあちゃんに愛されてたんだなってことを、あとで思い出せる。おじいちゃんに愛されてたんだなってことを、そのお話を聴いた記憶の中で、確信できるわけだよ。そういう働きがあるから、僕は生の声で聴かせてやってくださいと言うわけね。

生の声で聴かせるのはね、もちろん創作の児童文学を読んでやるのもいいですよ。けども、創作の児童文学ってのは、なんといっても文学だからね、読む文章になってるからね、そこは昔話とだいぶ違うんですね。昔話の、もともとの手を加えてない記録、昔話の調査記録みたいなものがもし目に入ったら、ぜひ読んでみてください。創作の文学とはうんと違いますのでね。それを意識して、読んでもらうといいと思うな。

それでね、そういう耳で聴くっていうことは、音楽と同じですね。音楽も耳で聴かれてきた芸術です。音楽の場合を考えてみてください。音楽の場合は長い歴史の中でいろいろな作曲家がいろいろな工夫をして、いろんな音楽を作りました。

音楽だって、もともとは別に作曲家がいたわけじゃないよね。ただちょっと声のいい人が歌ったとか、適当に踊りながら歌ったとか、そういうふうなごくごく庶民的な、個人的なものだった。それがだんだん音楽って分野に優れた人が出てきて、作曲やなんかして、芸術として高められてきた。それが今ある音楽なんだけど、もともとはみんな、おじいちゃんやおばあちゃんが踊りながら歌を歌ったりなんかしたという、それが音楽の始まりだよ。

音楽も、今はもう高級な芸術みたいに思われるけど、元来はごくごく素朴な、みんなの口の中にあったものなんですね。耳の中にあったもの。それでもね、そういうものがだんだん歌い継がれたりなんかしていくうちに、音楽の場合は洗練された形が形成されてきたのね。

音楽の場合、歌い手のほうも、作曲家のほうも、単なる歌い手だったでしょうけども、あるいは単なる楽器弾きだったでしょうけども、そういう人たちが聴き手になるべく分かってもらえるようにいろいろ工夫をしたわけよ。

まず何かといたら形だよ。音楽って、ただ歌っているだけだから、3分なら3分っていう時間の中で歌っているだけだから、形なんかないよね。だけど、形がなかったら聴いてるほうは把握できない。だから歌い手のほうは、なるべく分かてもらえるように、同じ節を3回繰り返したり、同じ節をちょっと変えてみたりして、そういう工夫をした。いろいろ音楽的な工夫を加えた。それが何代も何代も続いてくるから、音楽はだんだん磨かれた形ができてきたわけですね。それが今の音楽の形なわけ。

昔話の場合はですね、作家が出て昔話を読む文学にした、これはありますよ。だけど語り手自身というのは、田舎の語り手自身は別にそういう素養があるわけじゃないから、ただ語ってるんだよね。だけど、脇でよく聴いてるとね、やっぱり田舎のおじいちゃんやおばあちゃんの語りもね、繰り返しを適当に繰り返してくれたりなんかして、なるべく形を作ろうとしてるね。それは、おしゃべりとはいうけれども、単なるおしゃべりじゃないからね。昔話っていうのはやっぱりストーリーだから、どうしてもそういう自然に形ができてくるんでしょうね。

それは本当に、田舎でいろんな語り手がいらっしやるけどね、僕はずいぶん長いこと、いろんな方にお会いしてきたけど、やっぱり人によって違うんだよ。なんか分かんなく、べらべらべらべらしゃべっているっていうおじいちゃんもいた。べらべらべらべらしゃべってるのはおじいちゃんの語り手が多い。

でも、大抵の方はね、やっぱり子どもが分かりやすいように工夫していらっしゃるから、聴いてて分かるんですね。それは別な言い方でいうと、そこに形があるわけですね。3回の繰り返しをすとか、大事なことは同じ言葉でもう一回語ってやるというようなね。同じ場面は同じ言葉で語る、これは昔話の大事な原則だね。語りの原則ですね。

こういう一般論としてお話ししていると分かりにくいと思うので、僕、ひとつ語りますので聴いてみてください。馬方とやまんばが出てくる話なんですけどね。これ僕はどこで聴いたんだっけな。確か宮城県で聴いたんだと思うんだけどね。

昔あるところに1人の馬方がいた。ある日のこと浜へ行って、魚をたくさん仕入れて、馬の背に振り分けに積んで、峠の道を帰ってきた。日が暮れて、あたりが暗くなると、木の陰からやまんばが飛び出してきて、「これ待て。その馬の片荷おいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」と言うもんで、馬方はおっかなくなって、馬の背中の一方の荷物を後ろへ投げて、馬を引いてわらわら逃げていった。

そうしたらそのやまんば、その片荷の魚をばりばり食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「これ待て。その馬の片荷もうひとつおいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」と言うもんで、馬方は残りの片荷も後ろにぶん投げて、裸馬に乗ってわらわら逃げていった。

したらばやまんば、その片荷の魚もばりばり食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「こら待て。その馬の脚、1本おいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」と言うもんで、馬方は馬の脚を1本ぶった切って、「そうれ」って後ろに投げて、三本脚の馬に乗って、がったがったがったと峠の道を逃げていった。

したらばやまんば、その馬の脚もばりばり食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「こら待て。その馬の脚、もう1本おいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」と言うもんで、馬方は馬の脚をもう1本ぶった切って後ろへ投げて、二本脚の馬に乗って、がったがったがったがった峠の道を逃げていった。

したらばやまんば、その馬の脚もばりばり食っちゃうと、すぐまた追いかけてきて、「こら待て。その馬の脚、もう1本おいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」と言うもんで、馬方、これはもうとても逃げおおせるもんじゃねえと思って、馬を丸ごとそこにおいて、わらわら山の中へ逃げていった。

したらば、うまいことに池があって、その池のほとりに木があったもんで、その高い木に登って、上でじーっと隠れてた。やまんば、馬の脚をばりばり食ってしまうと、すぐまた追いかけてきた。池のほとりまで来たら、その池の水の中に馬方の姿が見えたもんで、「おめえ、そんなとこに隠れてるんだか。隠れたって駄目だぞ」つって、どぼーんと池に飛び込んだ。それを見て、馬方は木からするする下りてきて、ま

たやぶをこいで、わらわらやぶの中へ逃げていった。

したらば小屋があったもので、これはいい隠れ家だと思って、小屋に飛び込んで、梁に上がって、じーっと休んでた。

しばらく休んでると、なんと、さっきのやまんばがずぶぬれになって入ってきて、「おお、寒い寒い。今日は魚いっぱい食って、馬食って、腹くちくなくなった。どれ、甘酒でもわかして飲むか」と言っていて、いろいろの火に鍋かけて甘酒をわかした。それをわかしているうちに、くらーんくらーんと居眠りを始めた。それを見て、梁の上の馬方、屋根のかやを1本抜いて、甘酒をつっぱつぱと吸っちゃった。

したらばやまんば目を覚まして、「俺の甘酒、飲んだのは誰だ」と叫んだ。梁の上の馬方はちっちゃい声で「火の神、火の神」と言ったら、「火の神様が飲んだんじゃしょうがねえ。どれ餅でも焼いて食うか」と言っていて、餅を3つ持ってきて、火にのつけて、自分はまたくると背中を向けて背中あぶりを始めた。

餅が焼けて、ぷーっと膨らんできたころ、やまんばはくらーんくらーんと居眠りを始めた。ねぶかけ始めたっていうんだけどね、居眠りを始めた。それを見て、梁の上の馬方、その餅をつくと刺しては食べ、つくと刺しては食べちゃった。

したらばやまんば目を覚まして、「俺の焼き餅、食ったやつは誰だ」と叫んだ。梁の上の馬方は小さい声で「火の神、火の神」ついたらば、「火の神様が食ったんじゃあしょうがねえ。じゃあ寝ることにしよう。木の唐櫃からとに入って寝るか、石の唐櫃に入って寝るか」って独り言を言うから、梁の上の馬方はちっちゃい声で、「木の唐櫃、木の唐櫃」ついたらば、「火の神様がおっしゃるじゃあ木の唐櫃に寝よう」つって木のからとに入った。それを見て、馬方、梁から下りてきて、その木の唐櫃にキリキリキリ穴を開けだした。

したらばやまんば、「あすは天気だか。きりきり虫が鳴いてらあ」なんて言うんだけど、構わずキリキリキリキリ穴を開けて、穴が開いたら、馬方、そこからねゆを、熱湯ね、ねゆを注ぎ込んだ。

やまんば、初めのうちは、「この鼠やろう、しょんべんなんかひっかけやがって」なんて言うけど、構わずねゆを注ぎ込んでいったら、やまんば、「あつつい、あつつい、助けてくれ、助けてくれ」と言ったけども、「俺の大事な馬と魚を食ったかたきだ」と言っていて、熱湯をどうどうと注ぎ込んだんで、やまんばとうとう死んでしまったと。こんで、えんつこもんつこ、さけた。とって宮城県では終わるんですね。

「こんで、えんつこもんつこ、さけた」っていうのはね、僕たち、結末句と呼んでますけど、昔話って面白いことに、語り手はお話が終わると大抵こういう結末句をきちんと言うんですよ。「こんで、えんつこもんつこ、さけた」なんて、あんまり意味ないんだけどね。これで話が終わりだっていうあいさつを大抵するんですね。これは



日本だけじゃなくてね、ドイツの場合もそうなんですけども。日本では「これで話は終わりだよ。うそだと思う人はその鼠に聞いてみな」なんていうようなことを言ってね、ちょっと笑わせて、ほんと終わってるね。結末句といいます。

この話ね、僕は宮城県のあるおばあちゃんから聞いたんだけども、聴いててびっくりしたのね。このおばあちゃん、別に学問の素養もなんにもないんだよ。だけど実に見事にきれいに語っていったんですね。ということはどういうことかということ、語り手はやっぱり自分の語る話が子どもに分かってもらいたい。子どもが分かるように語ってやろうという気持ちがあるからだろうね。だからとてもはつきり感じましたね、僕は。

そういう意味で見ると、今の話ね、僕の下手な語りで聴いていただいたけども、語りの法則にぴたっと合ってるんだよね。もう本当に合致してるんですね。田舎のおばあちゃんが語りの法則なんて知ってるわけないよ、もちろん。だけど僕ら研究者のほうでは、昔の話にも語りの法則があるってことは知ってるわけね。そういう語りの法則から考えると、今の話はとても見事にできているんだよね。

これは細かくやるとすごく長くなっちゃうけども、まず、語りの法則っていうことはね、昔話に法則があるなんて考えてもいなかった。僕も考えてなかった。だけどそれをスイスのマックス・リュティという文芸学者が明らかにしまして、『ヨーロッパの昔話』という本を書いたんです。

マックス・リュティっていう人です。この本は僕が翻訳して岩波文庫に入ってます。ぜひ読んでみてください。『ヨーロッパの昔話』という本です。「その形と本質」という副題が付いてるんだけどね。岩波文庫だから誰でも手に入るでしょう。ぜひ読んでみてください。

マックス・リュティは、僕はそのあとずっと、亡くなるまでごく親しくさせてもらったんだけど、彼はね、その本の中で、私が調べたのはヨーロッパのメルヒェンだと、だから他の国のことは知らないって書いてあるんだよね。だけど僕が見るところでは、彼が言ってるヨーロッパの昔話の文法のほとんどは日本の場合も通用するね。中国の場合も通用するね。僕はそれ以後、いろんな国のものをやったんですけども、例えばシベリアとかいろんなものをやったんですけども、ほとんどだいたい共通するね。それは驚くばかりです。

それはなぜかって考えるんだけどさ、実は答えは簡単なんだよね。昔話は誰でも口で語って耳で聴いたからなんだよ。それおんなじなんだよ。口で語られて、子どもに耳で聴かれる場合、どう語ったら分かりやすいかといったら、もう国籍関係ないよね。だから、その語りの法則ってのはひろく共通だね。全世界って言い方すると危ないかもしれないけど、ほとんどの、いろんな国で共通ですね。

それは何かというと、今せっかく聴いてもらったから、その実例をちょっと使いたいんですけど、例えば最初の場面ね、馬の片荷を1つ食べるでしょ。その次にまた1つ食べるよね。1つと1つ、個別的ですね。まとめて一緒にじゃないんだよね。馬の脚もさ、1本切って、また1本切ってんだよ。2本まとめてじゃないんだよね。つまり整理されてる。とてもきれいに整理されてるでしょう。で、個別的に語ってますね。これ、一緒くたにされると分かんなくなっちゃうからね。

で、文法から見て、さっきの話で一番面白いのは、馬の脚を切ったところね。すさまじい場面じゃないですか、考えたら。馬の脚を切るんだぜ。しかも太い馬の脚でしょう。それをぶった切るんだから大変だよ。これをもし写實的に語ったら、おそらくすさまじい場面になっちゃうよね。なただけ何度も何度もひっぱたいて、血はあたりに飛び散って、馬は苦しんで七転八倒しましたって話になっちゃうでしょう。

昔話はそういうふうには語らないのね。昔話は写實的に語る喜びは持ってないんですよ。そうじゃなくて出来事を語るのね。馬の脚を切ったという出来事だけを語っているわけです。そこが文学と違うところね。文学だったら、切ったときにどうなったかというような状況を説明しなきゃ文学にならないと思うんだけど、昔話はその興味はないです。馬の脚を切りました、だけの話。切ったときに馬がどう苦しんだか、血がどう流れたか、そういう話はしない。

だから、さっきの馬の脚を切る部分なんてさ、ものすごい場面だよ。すごい、もう目を覆いたくなるような場面だと思うんだけど、昔話はそうは語らない。出来事だけを語る。馬の脚を切りました、という出来事を描写しない。これ大事な点だね。そして、内面的な苦しみなんてのは全然言ってないでしょ。馬がどう苦しんだかも言わないし、出来事だけを語っているね。

最後の、やまんばを逆にやっつける場面もね、実に簡単にやっつけてるわけ。出来事だけを語って、やまんばがいかに苦しみながら死んだかなんてことは語らない。中身を抜いて語るという言い方をします。中身を抜いて語る。別な言い方をすれば、写實的には語らない。

だからさっきの馬の脚を切るとこなんてのは、語れるわけですよ。あれを写實的に語ったら、とてもじゃないけど聴いてられないよね。聴いてられないと思う。ああいうふうになんて中身を抜いて語るから聴けるわけだね。馬が苦しんだとも言っていないね。そういう面が、さっきの昔話はよくできていると思うんだね。僕はだからよく使うし、僕の本にも書いてあります。

本のことをちょっと紹介させてもらいますけれども、『昔話の扉をひらこう』って本を僕は書いたんですね。これは、『暮しの手帖』っていう雑誌があるでしょう、あそこから出してもらったんですが、『昔話の扉をひらこう』という、いわば入門書で



す。ここにもさっきの話、入れました。馬方とやまんばの話ね。そして文法的な説明にも使いました。さっきの話、もうちょっと詳しく書いてありますので、もし興味があったら読んでみてください。

それでね、児童文学との違いは、もうだいたいお分かりいただいたね。児童文学だったら、そういう出来事があったらさ、内面の苦しみやなんかをきちんと書かなきゃ児童文学として薄っぺらなものになっちゃうよね。だからそこはもう全然違うと思ってください。

でもね、例えば図書館で本棚を見ていくと、児童文学の分野の中に昔話が入ってることが多いんだよね。なもんだから、昔話が児童文学のひとつだと思ってる方が多いかもしれないけど、それは全く別物だということをどうぞ知ってください。児童文学ではない。じゃあ何だかって言われたら、昔話なんですよ。昔話は昔話としか言いようがないね。

それからもう1つ大事なことは、グリム童話っていうやつですね。そのことに触れておきたいんだけど、グリム童話っていうから、グリムという人が創作した童話と思われがちですけども、実はあれも、もとは昔話であるというものが多いです。全部じゃないんだけどね、昔話だ。それをグリムが、まあ色を付けてというかな、文学として整えて、それで「子どもと家庭のメルヒェン」と名付けたんですね。

ドイツ語の原題でKinder- und Hausmärchen というんですけど、キンダーってのは英語のチルドレンね。ハウスは英語と同じね。子どもと家庭のメルヒェン集って意味。「グリム兄弟によって集められた子どもと家庭のメルヒェン集」、これが正式な名前です。創作ではないですね。もちろん手を入れてますよ。かなり文学的に手を入れてますけどもね、もとは昔話だということ。

それで、グリム童話についてはね、白百合女子大学は間宮史子先生がいらっしゃるから、勉強する機会はたくさんあると思うんですけど、ちょっと僕のほうからもお話ししておく、グリム童話は今お話したように創作文学ではない。元来は口伝えだったものをグリム兄弟が手を入れたんだということね。

それで昔話のほうへ戻りますけれども、じゃあ昔話は、何を語ってるのかっていうことになるね。いろんな言い方があると思うんだよ。よく世間で言われるのは、いろいろな教訓が含まれているとかね、「人生の教訓が含まれている」のような言い方があるけどね、もちろん最終的には教訓と言ってもいいかもしれないけど、昔話自体がですね、教訓を目指して語る人ってあんまりいないよ。

いないことはないけど。たまにはいるんだよ。僕もずいぶん、20年ぐらいフィールドワークやったから、その経験だとね、教訓話だと思って語ってる人もいるよ。大抵は男なんだ、それが。大抵はおじいちゃんなんだよな。おばあちゃんはあんまりそう

いうことは言わないんだけどね。そこは非常に特徴的だったね。

でも、いい語り手はね、あんまり教訓なんか前へ出さないですよ。教訓について言うよね、いろんな話があるでしょう。その中から教訓を引き出すことはできるよ、たぶん。教訓を感じ取ることはできるでしょう。だけど、昔話自体が教訓を伝えようと思って語ってるというふうには、僕は思わないな。

なんといっても、昔話を語る人は、お話の楽しみを聴かせてやろうと思って語ってるよ。それを受け取るほうが、ああ、教訓だなどひそかに思って受け取る、これはもちろんあるでしょう。いろんなことが含まれているからね。だけど、初めっから教訓話だと思わないでください。そういう本も中にはあるけどね。教訓話として昔話をまとめる本もあるけれども、僕はあんまりそういうのは賛成じゃないな。

僕の経験では、本来はお楽しみよ。昔話ってやっぱり本来はお楽しみ。お楽しみなんですけれども、その内容はですね、人生のいろんなことを語っているということをととても感じます。

それでね、僕は昔話についてはね、決して教訓話だとは思わないんだけど、でも人生の大事なことを語ってるなっていうのは実感しますね。それが一番はっきりしてるのはね、昔話はさ、駄目な子どもっていっぱい出てくるじゃない。みんなからばかにされていた子どもとかさ、それが修行に出てね、帰ってきたときには立派な若者になってたとかね。それから三人兄弟のうちの子、一番下の子は、お兄ちゃんのようにいろんなことができなくて、ばかにされていた。だけど最後には、結局その一番下の子が幸せを獲得したなんて話は多いよね。

僕はそここのところにね、やっぱりひとつの、語り手たち、昔話を伝えてきた人たちの人生の見方みたいなね、人生をどう見るかっていうその見方ね、それが残ってるなということを感じますね。

昔話の中には、駄目な子ってよく出てくるんですよ。ばかな子でさ、なんか親から物を売ってこいって言われたらさ、出掛けてって、なんか変なことを言って、ちっとも売れなかったみたいな話、いっぱいあるよね。そういう駄目な子っていうのね、昔話の中じゃあ主人公になることが多いんですけど、僕はそれ、とても面白いと思っているのね。

つまりさ、人間ってね、幼いときはさ、駄目な子なわけじゃない。例えば三人兄弟がいてね、一番下の子は小学1年生だとして、お兄ちゃんが3年生、5年生だとしたら、一番下の子はかけっこしたら必ず負けるよな。でしょう。算数なんかやらされたって、できないよな。お兄ちゃんはできちゃう。一番下の子って、いつもできないんですよ。それが昔話の主人公になるのね。で、おかしい話になってね、失敗したりなんかする話になるわけですね。

だから主人公としては、おかしな子、駄目な子が主人公になることが多いですんですけど、考えてみればさ、人間って、小さいときはみんな子どもだったわけじゃない。当たり前の話だけどさ。皆さんだって、生まれたばかりのときは、2歳だった、3歳だった、あるわけだ。幼稚園ぐらいの年だったって、みんなあるわけですよ。ね。

そのときは、例えば小学生のお兄ちゃんと比べたら、できないね。できない子だよ。5歳のときにはさ、9歳のお兄ちゃんと比べたら、やっぱりできないわけ。だからそれが笑いになってね、主人公になるのが多いんですけど。でも結局は、その主人公が最後に幸せになっていくという形がほとんど。昔話はほとんどそうですね。

ということはさ、人生そのものを語ってるんじゃないかなと思うんだね。誰でもみんな子どもだった。子どものときは大きい子と比べたらできないんだよ。能力のあるなしにかかわらず、できないっていえばできないんだよ。かけっこしたら負けるんだもん。必ず負ける。それは別の言葉で言えば、できないってことよ。お話はそれを使うわけよ。できない子、愚かな子として、それを主人公にするわけ。

でも、本来子どもは誰でも小さいときはできないんですよ。上の子と比べたら。当たり前の話。昔話はそれを主人公にして、でも、その子がやがてお兄ちゃんより優れてるとか、お兄ちゃんとおんなじように何かができる、成功するっていう話をするわけ。

ってことは、子どももそうだよ。末っ子の2歳の子でも、10年たちゃあ12歳になって、そうしたら、もうお兄ちゃんがやってること、まねしてできるようになるね。そうやって子どもってのは成長していくよ。昔話っていうのはね、子どものそういう成長を、人生のだな、人間は誰でも成長していくもんだよという、それを愚かな子どもだとかにして、笑い話みたいにして仕立ててるんじゃないかと僕は思うのね。

昔話の中の愚かな子っていうのは、本当に愚かなの。みんな。で、笑い者になるわけです。でも、最後にはそれが幸せになっていく。その最後には幸せになっていくってことを語ることに、僕は意味があるように思うわけね。

みんなの人生、われわれの人生、みんなそうかもね。3歳のときにはできなかった。10歳のお兄ちゃんよりもできなかった。でも、やがて20歳とか25歳になっていくと、おんなじようにできていくわけですよ。そういうプロセスを昔話は語ってるんじゃないかなと思って読むんですね。だからとっても楽しいです。

大人にならなかった子どもはないわけでね、みんな大人になっていくわけで、大人になっていくと、子どものころできなかったことがみんなできるようになる。そのところをお話ではうんと縮めちゃって、子どものころの、できない子どもと、それか

らできる子どもとごっちゃませにして、面白いお話を作っていく。そういうふうには感じるね。

そうしてみるとね、逆に子どものほうもさ、お話を聞くときに、変な間抜けな子どもが主人公が出てきても、それが楽しいんじゃないかね。「あいつ、ばかだなあ」と思って聞かないで、共感して聞くんじゃないかな、子どものほうは。自分じゃ意識しないかもしれないけど、「なんか僕とおんなじことやってるよ」みたいな気持ちでね、聞いてるんじゃないかなと思うな。そこが昔話のいいところじゃないかなと僕は思ってるね。

大きく見れば、確かに教訓的といえるかもしれない。ただ、教訓って言葉で言わなくてもいいんだよ。子どもの成長を語ってるよってという言い方が、僕は一番いいんじゃないかなと思うな。昔話ってね、どうも大きく見ると、全体、人間の成長、子どもの成長を語ってるなという感じがありますね。

それでね、僕はそういうお話を、もちろん子どもに本で、声に出して読んでやってもらいたいと思う。子どもがもちろん自分で読めるようになったら、読むのは構わない。いいですよ、もちろんそれは。だけど、そうなるまで、あるいはそうってからでもいいんですけど、なるべく周りの大人が自分の声で子どもに聴かせてやるということを、とても大事に思ってもらいたいというふうに思っています。

それはね、上手に語るとかは全然必要ないですよ。上手に語ろうなんて思う必要はない。それから、とても覚えられないと思ったら、もちろんお話を読んでやるのでもいいですよ。もちろんそうよ。読んでやったりして。特に絵本はね、絵が付いているから、読んでやるの、とても大事だと思う。絵と一緒に楽しめますからね。とてもいいと思う。でも、基本は自分の声で子どもにお話を聴かせてやること、それが基本だと思う。

僕はね、ある時期20年間ぐらい、よく田舎へ行ってお話を聴いたんですね。主に福島県が多かったです。それから山形県、それからおやじの故郷が山梨なもので、山梨県やりました。広島もちょっとやったことあるんですけどね。ずいぶん田舎へ、そういうのをやりました。

それでね、あるとき福島で、<sup>やまふにゆう</sup>山舟生という、うんと田舎の部落に行ったことがあるのね。いつもは調査するのは複数で行くんですよ。2人、3人でね。そうでないとメモを落とすからね。そのときはなんか知らないけど人手が足りなくて、僕ひとりになったんだよ。1人で行ったんですよ。

あるおじいちゃんに会ってね、その人はお話をよく知ってるよって紹介されて行ったんだけど、<sup>まくた</sup>幕田さんとおっしゃるおじいちゃんだった。そのとき74歳って言ってらしたな。僕のノートによりますとね、その日、14話、僕に語ってくれてるんです

ね。調査ですから、1つ話を聴くと、「この話、誰から聴いたの？」って、根掘り葉掘りきくわけよ。本当はそんなことはやりたくないんだけど、調査だからしょうがないんだ、これはな。

そしたらね、その14話のうち12話は、「うちのずんつあまから聴いた」と。おじいちゃん、福島言葉でずんつあまと言っていました。ずんつあまから聴いた。1話はその辺では誰でも知ってる話だった。それから1話は近所のおばあちゃんから聴いたと。あとの12話は全部うちのずんつあまから聴いたんだとおっしゃるのね。

それで1話語るとね、その幕田さんね、1話語ると、ずーっと額に手を当てて、しばらくこうやってるんだよ。僕はそのとき邪魔しないようにね、こっちも黙ってるわけ。しばらくするとね、「じゃ、やってみっか」っておっしゃって、また語り始めて。そうやって14話聴かせてくれたのね。

僕はね、そのおじいちゃんがこうやって、じーっと思い出してる時、この人、何を思っだしてるんだらうなっていうふうにしたのね。それで確信したんだけどね……。それで何歳から何歳までお話聴いたの？」ってきいたら、はっきり言うんだな。「4歳から8歳までの間だった」って言うんだよ。ちょうどお話を一番聴く年だよ。8歳ってまだ小学校に入ってちょっとでしょう。ちょうどお話を聴くときですね。4歳から8歳までだっちはっきりおっしゃった。その8歳っていうのがはっきりしてるっていうことはね、ひょっとしたら、ずんつあまは、その8歳のときに亡くなっているのかもしれないね。いなくなったのかもしれない。4歳から8歳までに聴いた話。

こうやって思い出してる間、僕は何を思い出してるんだらうと思った。で、確信したのがね、お話の一言一言じゃない。そうじゃなくて、自分に語ってくれたずんつあまの姿、声、それから、たばこのやにのにおいがしたかもしれないよね。あるいは囲炉裏の周りの暗い感じかもしれない。そういう全体を思い出していたんだなっていうふうに僕は思った。

もちろんそんなこと、おじいちゃんに確かめないよ。でも、一言、お話が終わったころね、「こういう話をする、ずんつあまのこと思い出すでしょうね」って言ったなら、「うん、思い出すねえ」っておっしゃったのね。僕はそれがすごく印象深かったんですね。

つまり、お話が伝えられるっていうことは、単にお話が伝えられるだけではなくて、その語り手の全体ね、語ってくれたずんつあまやばんつあまの全体を思い出すんだなということを、そのとき確信したのね。だから大事なんじゃないかと思うんだ。だからお話を語ってやるってことは大事なことなんじゃないかなと僕は思うんですよ。

幕田さんは戦争に2回行ってらんだって。中国へ兵隊として行ったそう。2度行ってららしい。それで、いろんな危ない場面に遭ってらって話もいろいろ聴いたんですけどね、そういうのを経てなお8歳まで聴いたずんつあまの話を思い出せるっていうのは、すごいことだなと僕は思ったのね。8歳までしか聴いてないんだよ。8歳までしか聴いてないずんつあまの話を、74歳の今思い出せる。しかも戦争の体験をして、2度も戦争に行っていて、それを経てなお思い出せるっていうのはすごいことだなと僕は思ってね、忘れられないんだよ。

そういう子どもへのインパクトの強い伝え方を、今大人たちはしてるだろうかということ、僕はいつも考えちゃうのね。どうだろうか。もちろんいろんなお話をしていると、日常的にもお話ししてる、おしゃべりもしてるだろうしね。だけど今ね、こうやっていろんなことが、テレビだとかいろんな機械が発達して、そっちで時間を使っちゃってらっていう面が、かなり強いんじゃないかと思うんだね。

それだって、もちろん便利でいいんだよ。便利の良さを僕は否定はしないよ。だけど、子どもが成長していくプロセスで大事なことは、テレビをたくさん見たり、DVDでいろんなものを見たりっていうことよりも、本当は、親とかおじいちゃんや、身近な大人の生の声なんじゃないかと僕は思うんだけど、どうだろうか。ね。それをぜひ忘れないでもらいたいと思う。

特にね、今日は若い人たち、若い学生諸君が聴いてくれてるわけだから、そのことを強調したいんだけどね、世の中便利であることは、それはとてもありがたいことだ。いいことだよ。けども、子どもはこれから長く生きるわけでしょう。長い人生の中で、いつまでも心の中に残っていることは何だろうっていうふうに思うね。特にね、人生の中でいろんなことあるよ。上り下りありますよ。悲しいこととかつらいことっていうのがあるよ。若者が、そういうつらいこと悲しいことにおつかったときに、それを支えてくれるものは何だろうかと思うんだよね。

それはテレビの番組とかなんかじゃないでしょ。機械を通した番組ではない、お笑いではなくて、身近な大人の声だと思うんだよね。身近な大人の存在。そして身近な大人の声だと思うんだね。それを大事にでもらいたいっていうことをね、今日は若い学生諸君だから特に言っておきたいと思うね。

世の中便利になって、いろんなものがありますから、どうしても、そういうものに頼りがちだと思うんだ。もちろんいいんだよ。便利なことを僕否定しないよ。僕だってそういうものを使うしね。だけど、大事なことは自分の声なんだってことを、ぜひ忘れないでいてもらいたいと思いますね。

声って、不思議なものですね。その人がもういなくなっても、耳の中に残ってるってこと、あるでしょう。皆さんもそれぞれそういう経験があると思うんだよね。おじ



いちゃんやおばあちゃんの声、あるいは先生、小学校のときの先生の声とかね。ですから、声がとても大事だと思う。

そして、そこまでいくと、僕はどうしても言いたいんだけど、声といたって、ただ、「あー」つつって声を出してるわけじゃないよね。しゃべってるわけでしょ。言葉に乗せて、声が発せられるわけですね。その言葉ね。言葉を大事にすることも忘れないでもらいたいと思うね。

言葉を大事にするっていうのは、具体的に言えばですね、子どもが分かりやすいように語ること。その分かりやすいっていうのもっと具体的に言えば、はっきり発音することとかね、明瞭に発音することとかね、子音や母音をはっきり区別すること、語尾まできちんと語ること、そういう細かいことまで僕は言いたいよね。それを含めてのことです。

どうだろうか。皆さん、自分の子どものころの思い出を振り返ってみて、おじいちゃんやおばあちゃん、あるいは学校の先生が言われたことの、その声の調子とか、抑揚とか、それから言う調子ね、おしゃべりが強いなんてことが耳に付いてませんか。そういうものって思い出すでしょう。あの先生のああいうしゃべり方みたいなね、そういうことってね、不思議に耳に残るんだよね。そして僕はそれが大事だと思ってるのね。とても大事だと思うんですよ。

僕は、それが大事だと思うのはね、僕自身、振り返ってみてね、もちろん僕ももう90年以上も生きてるから、いろんな人に出会ってるんだけど、いろんな人たちのそういうしゃべり方とかね、話しかけられ方、かけてくれたその言葉とか、そういうものってすごく覚えている。そういうもので自分の人生、成り立ってるなと思うんだよね。まあ人生ってのはいろんなもので成り立つんだけど、自分に語りかけてくれた人たちのしゃべり方とか、そういうものも僕の人生の大事な部分なんだと思う。

それを言えば、皆さんの周囲にいる子どもたち、これから現れるであろう子どもたちも同じなんだよ。皆さんの声をそういうふうを受け止めて、おそらく一生忘れないでいるでしょう。そう思うと、どうぞ言葉を大事にして、しゃべってやってもらいたいと思うね。

特にね、小さいときには聴く言葉ってとても大事だからね、それは大事に思ってもらいたいと思う。皆さんおそらく社会に出たら、いろんな意味で子どもと接すると思うね。自分の子どももあるだろうし、勤め先の子どものもあるだろうし、周りの子ども、子どもたちはこれから人生やっていくわけですから、その人生を支えていくこととしての言葉、皆さんの言葉が支えていくんだからね。皆さんの言葉が子どもを支えていくわけだから、それを思うととても大事だと思うよ。とても大事だと思う。

それでね、もうそろそろ締めくくりますけども、もちろん子どもに聴かせるものっ

てのは、別に昔話だけじゃなくていいんだよ。科学読み物だって大事だろうと思うし、歴史の読み物、そういうものを本を読んであげるといことは、とてもいいと思う。そういうもの、科学読み物とか歴史読み物は覚えて語るようなことじゃないからね、大抵は読んでやるんだだろうと思うけど、そういうものもとても大事だと思います。

もちろん子どももね、ある程度大きくなったら自分で読むだろうけど、でも、自分が読めるようになって、聴かせてもらうって案外うれしいことなんだよね。聴かせてもらうってうれしいことなんだよね。だから、「もうあんた読めるでしょう。自分で読みなさい」。これももちろん大事だよ、一方では。だけでも場合によってはね、自分で聴かせてやる、自分の声で聴かせてやるというのを、どうぞ忘れないでください。

そのためにはね、やっぱり自分自身も耳を敏感に保っていることね。聞くことに対して、敏感に保っていることが大事だと思うな。自分自身もね。音って消えちゃうもんだからね。音楽もそうですけど、音って消えちゃうもんです。だから、そういう意味じゃ、はかないものなんだけど、でも逆に言うと、いつまでも耳の中に生きているものなんだよね。だからすごい大きな力を持つてると思う。声っていうのは。それを大事にしてもらいたいと思います。

そろそろやめますが、僕ね、FM福岡というラジオで毎週しゃべってます。FM福岡。福岡のFM局なんだけども、FMだからどこでも聴けます。世界中で聴けるんですよ。ニューヨークで聴いてるってやつもいるんだけどね。「FM福岡 小澤俊夫」と検索していただくとね、パソコンで検索していただくと出てきます。「昔話へのご招待」という番組です。

これはね、白百合の僕の教え子だった人がスポンサーになってくれてね、今、「絵本の店あっぷっぷ」という本屋さんを福岡でやってるんですけど、スポンサーになってくれて、それで続いている番組なんですね。僕ひとりでしゃべってますので、いろんなことをしゃべってます。もちろん相棒のアナウンサーやなんかもいらっしゃるんですけど、いろんなことが話せるので、ぜひ聴いてみてください。昔話のことだけじゃなくて、いろんなこと、音楽のこともずいぶん触れています。

それから、さっき、この『昔話の扉をひらこう』をご紹介しましたけれども、その他に、小峰書店というところからグリム童話の翻訳も出してるんですね。『語るためのグリム童話』という本です。もしグリム童話を読むんだったら読んでみてください。これはね、グリム童話って初版から7版まであるんですけど、若いころの第2版の翻訳、早いころの文章ってわりと素朴で僕は好きなもんですから、その翻訳で

す。第2版の翻訳です。

それから、『語りつぎたい日本の昔話』というシリーズも出しています。これも小峰書店なんだけどね、日本の昔話としては、こういう本です。日本の昔話、これもね、僕の指導している語りのグループの方々の力で、実際に語ってもらって作りました。ですから読みやすいし、あるいは覚えて語るにも覚えやすいと思います。

それで、今覚えやすいだろうとうっかり言ったんですけどね、覚えるって、みんな聞いてて、ぞっとした人もいるね。私は覚えるのが大嫌いだってね。なんか試験のときを思い出して、覚えるのは嫌だっていう人がいるかもしれませんがね、昔話を覚えるってというのはね、試験と全然違うんですよ。昔話を覚えるってというのは、僕はこういうふうに指導しているのね。お話をずらずら頭から覚えようとしたら大変よ。入学試験とおんなじになっちゃうんでね。そうじゃなくて場面ごとで覚えるんですよ。

さっきの馬方でいうと、最初にやまんばが現れた場面。それから追いかけてきた場面。場面ははっきり頭の中に入れて、それをまずやって、そしてそれぞれの場面の中で、今度はせりふを覚えていくわけです。やまんばの「これ待て。その馬の片荷をおいてけ。おかなきゃおまえを取って食うぞ」っていうせりふを覚えていく。まず場面です。で、区切る。僕は実際に場面を区切ったほうがいいと思う。実際に場面を区切って、そしてその場面をはっきり頭に入れて、それからその中のせりふを覚えていくというふうにする。そうするとね、そんなに難しくないよ。

この覚え方は、さっきご紹介した、この『昔話の扉をひらこう』の中で、実例を1つ挙げてやりました。こういうふうに分けてください。こうやって覚えてくださいっていうのを実際にやりましたから、参考になると思う。

場面で覚えるってというのはね、僕の発明じゃないの。僕は長いことフィールドワークしてきたから、いろんな語り手に出会ったんですね。語り手たちが、皆さんおっしゃるのはね、その場面なんですよ。その場面をしっかりと思い出さよって言ってらっしゃる。

例えばね、鈴木サツさんという優れたおばあちゃんがいらしたのね。岩手県遠野のおばあちゃんでした。僕は20年ぐらい歩いて歩いて、本当にたくさんお話を聞かせてもらったから。そのおばあちゃん言ってたね。これは父親から聞いたんだけどね、おやじが語ってくれるときに、おれはその場面を見ていたと。おやじが語っているお話の場面を見ながら聞いたと。頭の中でだよ、もちろん。今おれが語る時、おれは自分が語っている場面を見ながら語っていると。ここ大事だと思った。自分が語っている場面を見ながら語っているんだとおっしゃったの。素晴らしいと思った。それを見ながら語ってるんだ。本当に自分でね、手をこうやってね、おれが語ってる場面を見ながら語ってるんだよとおっしゃった。

よく分かるね、それは、よく分かる。僕もお話を覚えるとき、そうです。場面で区切って、場面をはっきり頭に入れて、すると、場面が入ってればね、あとは説明すりゃいいんだから、自分が。だから覚えようと思わなくたって自然に覚えられるよ。そういうことね。

今のことはね、お話を語ろうという方はぜひ覚えとくといい。ずらずらと文章を最初から覚えたら大変だよ。そうじゃなくて、場面にまず区切る。そして場面の登場者たちのせりふを、登場者のせりふとして覚えていくというふうにやるとね、そんなに難しくないよ。どんどん入ってくると思う。どうぞ試してみてください。皆さんね、若いからまだ覚える力あるしね、だいたい試験のときにいろんなものを覚えることに慣れてるだろうから、覚えるのはそんなに苦じゃないかもしれないね。ぜひ覚えて語ってください。子どもたちが喜ぶますからね。

ということで、あんまりまとまった話じゃないんだけど、僕の話はこのくらいで終わりにいたしますね。どうもご清聴ありがとうございました。